

陶靖節詩箋補正

斯波六郎

陶詩注釋諸書の内、用典の探求に最も力を用ひてゐるのは古直の「陶靖節詩箋」であらう。私がこの書をはじめて読むことのできたのは、昭和二十二年秋に私は私なりに一応陶詩の研究を終了した、その後のことであるが、この書によつて、私の研究の不完全な点の是正されたこと甚だ多かつたとも、この書の説で私の納得し兼ねた所も亦決して尠くはなかつた。そこで今、この書の説で、私の賛同しがたいものと、この書では未だ指摘してゐないが、その裏、恐らく典故を用ひてゐるであらうと思はれるものとの若干條について、卑見を述べ、以て大方の叱正を仰ぐことにする。尤も、私が恐らく用典であらうと思ふにも拘らず、この書で出典を指摘してゐないもの内には、彼の国人にとつてはわかりきつたことである。爾に、わざ／＼それを明示する必要の無かつたものもあらう。けれども、我らにとつては、それらをも明示してくれる方が便利だと思ふから、この篇では、それらについても卑見を擧げておいた。又、所謂用典の内にも、之を疑密に考へれば、作者自身は典故であると明瞭に意識しなかつたものもあらう。即ち、例へば、今の中国人が「禮尚往來」とか、「奕本加厲」とかいふことをその日常の会話に使つても、前者は禮記曲禮に、後者は昭明文子の文選序に、見えてゐることを意識してゐる者は殆どあるまい。それと同様な場合が、古人の作品の用語にも絶無であるとはいへぬのである。とはいへ、かかる場合は於て、縱しんば、作者が、その出典を明瞭に意識しなかつたにしても、その語句には、何かしら、或る趣きのあることを感じながら用ひたであらうと推測せられたので、隨つて詠者は、その語句の出典を知ることによつて、その作品を一層立體的に味ひ得ると思はれるから、この篇では、作者が出典を明瞭に意識してゐなかつたか否かといふことは向題外とした。

我が師鈴木豹軒先生の「陶淵明詩解」が昭和二十三年一月に刊行せられた。私がこの書によつて教へられたことは、從來読んだ陶詩関係の何れの書よりも遙かに大きいのであるが、それとともに「陶靖節詩箋」の補正として立論した卑見の内には、既に先生の高説によつて解決せられてゐるものもあり、又、私の全く気がなかつた用典が先生によつて新に明示せられてゐるものもあることを知つたので、今、それらの諸條はすべて先生の高見を引用させていただくことにした。

この篇は、「陶靖節詩箋」を逐條的に吟味して書いたといふものではない。前文に一寸触れておいたやうに、私が陶詩の研究を一応終了したのは、まだこの書を見ないうちのことであるので、貧弱ながらも自身の意見を持つてゐて、その上でこの書を読んだわけであるから、その際に気づいた両者の意見の相違の若干條を書きとめたものがこの篇なのである。

### ○ 停 雲

并序

有酒有酒

宋毛詩周頌有誓曰、有誓有誓、又有客曰、有客有客

人亦有言

宋毛詩大雅蕩曰、人亦有言、又桑柔同

曰日干征

宋毛詩唐風蟋蟀曰、今我不樂、曰日其蹇

豈無他人、念子寔多

宋毛詩鄘風廣疇曰、子不我思、豈無他人、又曹風杖杜曰、豈無他人、不如我同父、又羔裘曰、豈無他人

惟子之故

### ○ 時 運

并序

時運遊藝春世、春服既成、景物斯和

宋論語先進曰、莫春者、春服既成、冠者五六人、童子六七人、浴乎沂、風乎舞雲、詠而歸

百風自南」

宋毛詩大雅卷同曰、有卷者阿、飄風自南、乃敢乃濯」

乃敢乃濯」

宋毛詩小雅斯干曰、乃寢乃興、載攸載賑」

載攸載賑」

宋毛詩衛風淇水曰、載笑載言、又小雅采芣曰、載飢載渴」

但恨殊世、邈不可追」

宋楚辭九章懷沙曰、湯街久遠兮、邈而不可慕」

○榮木 并序

志彼不舍」

箋曰、荀子勸學篇、駑馬十駕、功在不舍」

宋湯注既引荀子此文、箋蓋襲湯注、恐非、今玩此詩、其意謂、志在勇勉不息、欲如川之逝、不舍晝夜、非謂思功在不舍、約軒先生解、引論語子罕、子在川上曰、逝者如斯夫、不舍晝夜、甚是、當從約軒先生說、

崔瑗河間相張平子碑曰、君天姿淳哲、敏而好學、如川之逝、不舍晝夜、此詩用典、與崔碑同」

我之懷矣」

我之懷矣」

宋毛詩邶風雄雉曰、我之懷矣、自貽伊阻」

○答龐參軍 并序

衡門之下」

宋毛詩衡風衡門曰、衡門之下、可以棲遲」

之子之遠」

箋曰、張衡征篇、之子之遠、我勞如何」

宋此嘗引毛詩小雅白華曰、之子之遠、俾我獨兮、又曰、之子之遠、俾我疢兮、

翻彼方舟、容裔江中、  
宋毛詩邶風柏舟曰、汎彼柏舟、在彼中河、

勗哉征人、  
宋尚書攷誓曰、勗哉君子、  
以保爾躬、

宋毛詩小雅南山有臺曰、保艾爾躬、

○勸農

抱樸含真、

宋牽秀彭祖頌曰、含真蕩穢、離俗遺務、  
沮溺結繩、

宋約軒先生解、引論語微子篇文、

○命子

於赫愍侯、

宋韋孟諷諫詩曰、於赫有漢、  
啓土用封、

宋尚書武成曰、惟先王、建國啓土、

禮禮丞相、

宋毛詩大雅文王曰、禮禮文王、  
桓桓長沙、

宋毛詩周頌桓曰、桓桓武王、

天子疇我」

宋豹軒先生解、引尚書堯典、帝曰、疇咨若時登庸、

匪懈不忒」

宋毛詩曹田鴻禧曰、其義不忒、又魯頌閟宮曰、享祀不忒、

匪我寡陋、

宋禮記學記曰、廢學而無友、則孤陋而寡聞、

匪徒弗反、

宋毛詩鄭風燕燕曰、瞻望弗及、涕泣如雨、

三十之罪、無後為急、

笑曰、禮記中庸、成義三十、

宋家世謬、豹軒先生解、引孝經五刑曰、

五刑之屬三千、而罪莫大於不孝、最是、當從豹軒先生說、

### ○九日閒居

世短意常多、

宋古詩曰、人生不滿百、常懷千載憂、

### ○歸園田居 并序

山澗清且淺、可以濯吾足、

宋古詩曰、河漢清且淺、楚辭漁父曰、滄浪之水清兮、可以濯吾纓、滄浪之水濁兮、可以濯吾足、

### ○示周統之祖企謝景東三郎

道喪向千載、

宋莊子繕性曰、世喪道矣、道喪世矣、世與道、交相喪也、

言詠遂賦詩」

宋阮籍詠懷詩曰：詠言著斯章」

○乞食

○怨詩楚調示龐主簿

吁嗟身後名」

箋曰：晉書張翰傳：鄉乃可縱適一時，獨不為身後邪」

宋箋恐非，此疑當引張季鷹曰

使我有身後名，不如即時一沽酒（世說任誕篇引）

○答龐參軍并序

物新人惟旧」

箋曰：書：人惟求舊，器非求舊，惟新」

宋箋引書：見盤庚篇，潛夫論交際篇亦曰：語曰：人惟舊，器惟新」

○連雨獨飲

任真無所先」

宋約軒先生解：引老子曰：不為物先，不為物後，故能與萬物主。莊子（刻意）曰：不為福先，不為禍始」

○移居

相思則披衣」

宋書王維詩曰：展轉不能寐，披衣起彷徨」

○和劉柴桑

古詩等說唐文

宋曹操短歌行曰、但爲君故、求吟至今。」

○和郭主簿

遙遙望白雲」

宋莊子天世曰、夫聖人、十歲厭世、去而上僊、乘彼白雲、至於帝鄉。」

○於王撫軍座送客

爰以履霜節」

宋周易文言曰、履霜堅冰至。」

目送回舟遠、情隨萬化遺。」

宋曹植思友人詩曰、情隨玄陰滯、心與迴飄俱。」

○癸卯歲十二月中你與從弟敬遠

簞瓢謝屋設」

宋論語雍也、子曰、賢哉回也、一簞食一瓢飲、在陋巷、人不堪其憂、回不改其樂、賢哉回也、此詩謂、

一簞食一瓢飲、猶且屋空。」

○乙巳歲三月爲建威參軍使都經錢溪

終懷在整舟」

宋壘舟譬隱遁、約軒先生解、引莊子大宗師曰、夫藏舟於壘、藏山於澤、謂之固矣、然而夜半有力者、

覆之而走、昧者不知也。」

諒哉宜松柏」

等曰、莊子讓王篇、霜雪已降、吾是以知松柏之茂也。」

宋箋引莊子、未如約軒先生解、引論語子罕、歲寒、然後知松柏之後凋。」

○飲酒 并序

積善云有報」

笑曰：「易繫辭：善不積，不足以成名；惡不積，不足以滅身。」

案笑所引未安。約軒先生解，引周易文言：積善之家，必餘慶；積不善之家，必餘殃。繫辭不如文言之  
尚矣」

欲辨已忘言」

笑曰：「莊子齊物論：辯也者，有不辯也。大辯不言。李善曰：莊子曰：言者所以在意也，得意而忘言。」

案此當引莊子知北遊：狂屈曰：「唉！予知之，將語若，中欲言而忘其所欲言。」笑兩引並未安」

嘯傲東軒下，聊復得此生」

笑曰：「世說：周僕射傲然嘯咏」

案笑非，郭璞遊仙詩曰：嘯傲遺俗，羅得此生」

顏生稱尚仁」

笑曰：「論語曰：回也，其心三月不違仁」

案論語見雍也篇。列子仲尼篇亦曰：子貢問孔子曰：「顏回之為人奚若？」子曰：「回之仁，賢於丘也。」

雖留身後名」

案世說任誕：張季鷹曰：「快我有身後名，不如即時一杯酒」

擺落悠悠談」

案晉書王導傳：王導曰：「悠悠之談，宜絕智者之口」

規規一何愚」

笑曰：「莊子秋水篇：涇井之毒聞之，適適然驚，規規然自失也」

案秋水篇又曰：子乃規規然，而求之以寤，索之以辯，是直用管闕天，用錘指地也。不亦小乎。細玩此詩，引秋水後文為較勝」



淹留遂無成」

宋楚辭九辨曰：寔淹留而無成」

何嘗失頭歎」

宋顏延之語默、周易繫辭曰：君子之道，或出或處，或默或語。左思魏都賦曰：緜默語之常倫，常膠言而踰

傳」

又及魯中史」

宋莊子盜竊、路大慈曰：子之道，狂狂汲汲，詐巧虛偽爭也，非可以全真也。奚足論足」

終日馳車走」

宋魏氏春秋曰：阮籍、率意曠曠，不由徑路，車迹所窮，輒慨笑而反（魏志卷二十一）

### ○有會而作 并序

歲云夕矣」

宋毛詩小雅小明曰：歲律云莫，采芣履葭，餘也已矣夫」

餘也已矣夫」

宋論語衛靈公曰：知也，終在其中矣」

### ○雜詩

盛衰不可量」

宋詩焦仲卿妻作曰：人事不可量」

昔為三春葉、今依秋蓬房」

宋石崇王明君辭曰：昔為匣中玉，今為墓上英」

冰炭滿懷抱」

宋楚辭七諫曰：冰炭不相容」

古人惜寸陰」

箋曰：晉書陶侃傳、大尉聖者、乃借寸陰、至於衆人、當惜分陰、

案晉陽秋、陶侃云、大尉聖人、猶惜寸陰、至於凡俗、當惜分陰、引晉書不如晉陽秋、  
去去欲何之、南山有舊宅、

案毛詩唐風葛生曰、百歲之後、歸于其居、又曰、百歲之後、歸于其室、

御冬足大布、

案莊子山木曰、莊子衣大布而禰之、

○詠 貧 士

癡渴曝前軒、

案列子楊朱曰、昔者宋國有田夫、常衣緇屨、

僅以避冬、暨春凍作、自曝於日、

非道故無憂、

箋曰、孟子、非其道也、祿之以天下、弗顧也、

案箋所引未安、約軒先生解、引論語里仁、貧與賤、是人之所惡也、不以其道、得之不去也、

是常從約軒先生說、

道勝無戚、

箋引何孟春曰、韓非子、子夏曰、吾人見先王之義、出見富貴、二者交戰胸中、故臆、今見先王之義戰勝、

故肥也、

案韓非子見喻老篇、但此詩曰道勝、而不曰義勝、何注引韓非子恐非、淮南子精神訓曰、子夏見曾子、一躍一

肥、曾子問其故、曰出見富貴之榮而欲之、入見先王之遺、又說之、兩者心戰、故臆、先王之道勝、故肥、

與此詩道勝正合、淵明所據是淮南子、而非韓非子、無疑、

○詠 二 疏

問金終寄心、

宋漢書疏廣傳曰：疏廣教問其家金餘尚有幾所。」

○ 讀 山 海 經

俯仰終宇宙」

等引李善注莊子老萊子曰：其疾也，俯仰之間，再撫四海之外。」

宋錢萼李注引莊子：未安，此疑當引嵇康答向子：期難養生論曰：俯仰之間，已再撫宇宙之外。」